

小児肥満検診における若干の検討と考察

山田 真理, 岸本 照美, 榊原 淳一, 福田 克治, 前園 強, 井川 新三
(和泉市立病院 中央検査科)

【目的】 生活習慣病、特に糖尿病の成因に肥満が大きく関与している事は言うまでもない。2型糖尿病、糖尿病予備軍の人口が増えつつある現在、小児の肥満においてもこれらとの関連性は無視できないであろう。今回、小児肥満検診において血糖値、インスリン濃度、脂質関連項目等、若干の検討を行う機会を得たので報告する。

【対象と方法】 小児肥満検診を受診した肥満度 20以上の6~15歳の小児90名(女子23名、平均年齢10.4歳、男子67名、平均年齢10.2歳)を対象に空腹時血糖値、インスリン濃度、血清脂質関連項目と肥満との関連性について検討を行った。

【結果】 3.3%が空腹時血糖値で境界型を示した。96.7%の小児が空腹時血糖値正常にもかかわらず、51.1%が高インスリン血症であった。肥満度別にみると軽度肥満(20~29)では25%、中等度肥満(30~49)では42.9%、高度肥満(50以上)においては78.3%と肥満度が増すにつれて高インスリン血症の割合が高く

なった。インスリン抵抗性をHOMA-IRで表すと異常値1.6以上は全体の86.7%、インスリン抵抗性があると考えられる2.5以上は64.4%と高値であった。全体の30%に脂質異常が認められ、その内訳は、TG 150mg/dL以上、LDL-C 140mg/dL以上が共に15.6%と高く、T-CHO 220mg/dL以上は13.3%、HDL-C 40mg/dL未満は4.4%であった。

【考察】 小児肥満検診における結果は肥満によるインスリン抵抗性の増加を示し、これに伴う生活習慣病、糖尿病及びその合併症の存在を示唆するものであった。現在の生活環境は成人のみならず、小児肥満の増加を促進させる環境そのものであり、小児肥満の実態を知る事自体が、我々個人の生活習慣の是正を促すものであり、生活習慣病の予防を考える上での重要性を認識させるものであった。

連絡先 0725-41-1331 (内線2227)